

ひかりのこ

6月園便り

聖ミカエル幼稚園
2015年5月22日

月主題：おもしろい

『インクルーシブ教育』

5月も後半になり、お母さんと別れて泣く子ども本当に少なくなりました。昨日まで泣いていたのに、次の日からは全く泣かないで、ニコニコ登園してくる女の子もいます。彼女の小さな心の中で、すっと納得する何かがあったのだろう、と思います。泣いていても、ニコニコしていても子ども達はみんな一生懸命に毎日を送っていて、本当に一人一人を愛おしく感じます。

さて、私たち聖ミカエル幼稚園が所属している学校法人聖公会北海道学園では、昨年より特別支援学習会『ぶどうの木』を立ち上げ、5つの園の先生方が定期的に集まり、学びを深めています。この活動が文部科学省の行う『インクルーシブ教育システム構築モデル事業』に認められ、今年からもっと活動を広げられるようになりました。これまで必ずしも十分に社会参加ができる環境になかった障害を持った方々が、積極的に社会参加、社会貢献をし、障害がなくてもあっても、相互に人格と個性を尊重し支え合う、全員参加型の社会（共生社会）を目指すことは、我が国のもっとも積極的に取り組むべき重要課題とされています。その共生社会の土台となるのが、『インクルーシブ教育』です。簡単に言うと障害があってもなくても、共に学ぶことによって、どの子どもをも成長させることのできる教育ということなのです。

キリスト教保育を行う私たちにとっては、その理念は当たり前のことです。でも、どの子どもをも成長させるにはどうしたらいいのか、ということになると、私たち保育者の学びと工夫が不可欠になります。定期的に行われる『ぶどうの木』では、毎回実践的な検討会が開かれています。特別支援の学びを深めることは、先生方の子どもを見る力、子どもにとって今どんな指導が必要かを判断する力を高めることとなります。これはどの子どもにとってもプラスに働く先生たちの力となります。

園長の私にも、より高い力量が求められることとなります。そこで、私は今年から、教育大学の大学院へ進むこととしました。園長の仕事をしながら、夜間と土曜日に講義を受けることができます。学んでいる内容は、臨床心理関係です。将来的には臨床心理士の資格を取ることを目指しています。

私たち聖ミカエル幼稚園の教員の学びの原動力は、子ども達です。

かわいい、かわいい子ども達のために、自分は何をすべきか、を先生方が真剣に考えているのです。現状に満足せず、いつも向上心持ち続けていきたいと思えます。

園長 渡部 良子

キリスト教保育

「病いのときに」

5月12日、「聖書から学ぶ子育て講座」を行い、大勢のお母さん方にご出席いただき、感謝いたします。当日、私はマザー・テレサについてお話をしました。あまりにも有名で今さらという気もしましたが、改めて調べてみると、人間として信仰者として、卓越した人だと改めて感じました。

マザーは、重い病気を抱えた人に出会うと、「病気は神様からのプレゼントです」というのです。これは理解しがたい言葉です。苦しんでいる人にとっては傷口に塩を塗るような、辛く残酷な言葉にも聞こえます。しかし、マザー本人はそれを承知の上で語ります。

重い病気になったり、辛い経験をすると景色が変わって見えることがあります。いつもと同じ家の窓から見える風景や家の中の様子、そして家族の様子が違って見えるのです。それは、いままで肉体としての目が見ていた風景から、心の目、あるいは魂の目を通して見ているからではないでしょうか。人は自分に命を与えたものに対する憧れを、だれもが心の奥に持っているものです。それが重い経験をすると回路が切り替わって表に出てくるのです。

病いがプレゼントであるということは、病いを通して、今までは見逃していたものが見えてくる、同じものを見ても、その背後にあるものが見えることかもしれません。もし、やがてそれが感謝や喜びに変わるとすれば、病いもまた神様からのプレゼントに違いありません。

最後に、カトリック教会の晴佐久昌英神父の『病気になったら』という詩の一節をご紹介します。

「病気になったら 心ゆくまで感動しよう。食べられることがどれほどありがたいことか 歩けることがどんなに素晴らしいことか。新しい朝を迎えるのがいかに尊いことか。忘れていた感謝のこころを取り戻し この瞬間自分が存在している神秘 見過ごしてた当たり前のことに感動しよう。 またとないチャンスをもたらしたのだ。いのちの不思議を味わうチャンス。」

チャプレン 司祭 下澤 昌